人口問題研究 第五卷 第七・八・九號

調査研究

産兒制限問題を主題とする若干の人口理論的省察

本多龍雄

內容目次

一、序言、特にどういう意味で、又どういう點が理論的省察の對象となるか
二、簡略なる人口史的展望、近代社會の誕生まで
三、近代社會の生成途上における人口問題の推移、産兒制限思想が近代市民階級の實踐的イデオロギーとして成り立つまで
四、産兒制限の普及に伴う新しい人口危機の發生
五、若干の産兒制限反對論の吟味、産兒制限問題に不可分な階級的利害の葛藤について
六、近代社會の人口法則と近代的人口危機の必然性について
七、將來社會主義社會における人口の推移について、社會主義的人口論の吟味
八、危機意識下の人口問題、歷史の進行に參劃すべき人口問題固有の立場はどこにあるか？
九、民主主義的人口政策の指導目標
十、總括的摘要
附論、我が國における人口問題並に産兒制限問題の特殊的樣相について

一、序言、特にどういう意味で、又どういう點が理論的省察の對象となるか？

個人の自由の意識と、從つて又その責任觀念の特に近代的な發達と強化をその精神史的な背景とし、私生活における家族扶養負擔の輕減、進んではその改善向上への努力を直接の起動因として行われる近代市民に特有な産兒數の制限行爲が、今日一般に「産兒制限」または「産兒調節」などの呼稱の下に取りあげられている問題の歷史的、社會的な本質であり、そういう意味で之を人口理論的省察の對象として取りあげる。從つて、それは人間の歷史と共に古い人口制限行爲の特に近代的な形態であり、個々人の自發的な自由の行爲でありながら近代的生活意識と生活樣式とを背景とした歷史社會的必然性をもつ大衆的な社會現象でなければならぬ。所謂「新マルサス主義」の主張と運動とはその最も自覺的、典型的な表現といつてよいが、しかしそれは飽くまでこの近代的志向の一つの凝集點をなすものであ

つて、その根ざすところは更に廣く且つ深いものでなければならぬ。そういう廣汎かつ深刻な歴史社會的現象としてこそそれは今日の人口問題の焦點に浮びでてくるのである。

我々がいま問題とする産兒制限の右の如き近代的特性は之を更にその實際的、技術的な面から眺めるときまた一段と明瞭に納得せられよう。それは近代市民に生來的な個人生命尊重の精神を前提とした避妊行爲を中心とするもので、新マルサス主義の勸奬するところはこの點においても亦最も典型的なものといつてよい。ただこのような精神的志向には種々の陰影と段階とがあり、避妊への意圖は墮胎の實行をその反面の社會的事象として隨伴するものであることを拒み難い。そういういみで我々は人工流産の行爲をも含めて近代的産兒制限の問題とし、併せて之を人口理論的省察の對象とせねばならぬ。非合法的手段が大衆的に慣行せられるにはそこにそれだけの社會的必然性があり、又それだけの一應の思想的背景もあるといつてよいのである。ただ墮胎と竝んで嘗て農村社會に慣用された嬰兒殺しや間引きの行爲が全く近代人の道德的感覺に背馳するものとなつたことはいうまでもない。しかも現在なお一部農村的地方にそのような慣習が持續しているのは、その社會的動機においては近代的産兒制限への要求に添いながらも、その方法手段において封建的遺習を殘存しているものといつてよく、結局は農村社會そのものの近代化過程における過渡的、乃至は後進的な特殊性格に原因するものということができよう。が又、同じ墮胎行爲であつても、例えば破倫行爲の結果を陰蔽するために行われる墮胎行爲の如きが、我々がいま人口問題の上から取りあげようとする所謂「産兒制限」問題の埒外にあることはいうまでもない。

要之、我々の問題とする所謂「産兒制限」とは、自らその私生活を經濟的破綻から救うのみならず、更に之を改善向上して近代文化の提供する社會的福祉をより多く分有しようとする近代市民に特有な努力をいい、個々人の自由と責任とに委託された生活の合理化を性生活の上にも實現しようとするいみでは最も典型的な近代的運動の一つといつてよいものである。

所謂「産兒制限」問題のいみするところが概ね右の如くであるとすると、その人口理論的省察が取りあげねばならぬ問題の焦點も亦おのづから限定せられよう。我々は第一にその近代的特性を廣く人口史觀的展望の上から捉えねばならぬ。特に近代社會がその迂餘と曲折の後に成就し得た史的成果の一つとしてその歴史的意義と存在理由とを明らかにするところがなければならぬ。が之と同時にまた、第二には、この個々人の自由と責任とに委託された近代社會の社會的要請はそも〳〵如何なる社會經濟的構造連關と、とりわけ又如何なる社會階級的構成と分化を現實の横杆として貫徹されたものであるかを解明せねばならぬ。問題の個人的な切實さと社會的重大性とに相應して當然に生ずる是非兩論の岐るるところも亦そのような社會階級の階級的分化と葛藤の中に捉えられねばならぬ。そして産兒制限の普及に伴う出生率の恒常的な低下傾向と之に基く近代的人口危機の杞憂は特に人口問題の上から無視することのできない問題の核心點とならざるをえまい。そして若し、謂うところの人口危機が深く近代社會の人口法則に根ざした歴史社會的必然性をもつたものであるならば、我々は更に、第三に、この新しい人口危機への認識の中で採擇されねばならぬ人口政策的指導の目標をも考慮するところがなければならぬ。それは恐らく人口危機なるものの本質を究明し、人口問題そのものの本來の意味と立場とを再認することによつてのみ始めて能くし得るところの問題でなければならぬ。産兒制限問題の人口理論的究明は當然にそこまで問題を内攻させる根深さを

もつているといつてよいのである。概ね右の如き三點を中心とし以下適宜節を分けて若干の省察を試みることとする。

二、簡略なる人口史的展望、近代社會の誕生まで

人口問題は、人間の存在そのものと不可分な宿題の一つであるが、過剰人口の脅威と人口制限の努力も亦この人間の歴史と共に古い。そういうみでは人口問題とは卽ち過剰人口問題だと斷言してもさして失當でないばかりでなく、更に進んでは人間の全歴史を、いいかえれば社會、經濟、文化の諸領域に亙る凡ての人間的營みをこの自然生物學的な過剰人口傾向に對する直接間接の人間的抑制の努力として意味づけることさえ決して不可能ではないかもしれない。そのような史觀の當否については姑くおく。少くとも人間の集團生活における社會的規律の成立とその文化的洗練は動物的本能的な衝動に對する人間的自制の努力と表裏しており、且つそのような相應關係は性生活の領域において特に著しい。今日の殘存原始民族の間に觀取されるさま〴〵の習俗は先史時代の我々の遠い祖先の生活を類推させるに格好のものであるが、或いは夫婦間の性交が長期に亙つて禁制せられる習俗があり、或いは墮胎、嬰兒殺し等が極めて常態的かつ規則的に實行せられている例がある。例えば、カア・ソンダースの告げるところによると、フナフチ島では母親がその第二子、第四子、第六子とその出生兒を一人おきに破棄する習俗があり、その他一定數以上の出生兒を破棄する習俗は到るところに觀察される。しかもこれらの人口制限行爲はそのような原始共同社會の實際的必要に基き、從つてまた極めて强力な共同社會的强制力の下に貫徹されていることを我々は特に注意せねばならぬ。寧ろそのような原始的な、不可抗力的な人口制限の必要がそのように强力な共同社會的結合を必然化するのだといつた方が一層適切であるかもしれない。カア・ソンダースが先史代における人口調節作用を飢饉、疾病、戰爭等による人口の破壞作用に歸する一般の見解、或いは少くともかかる作用の過大評價に抗議し、人口制限は共同社會的な强制力によつて遺憾なく充足されていたであろうことを現存原始民族の事例から推論しているのは確かに傾聽すべき論斷といつてよく、我々はここに人口制限の行爲が人間の共同生活と不可分な社會的必要に根ざし、社會的な强制力を伴う社會的要請であることを最も明白に觀取することができるといえよう。

乍併、社會進化の歴史は惣じて個體の獨立、個人の自由と解放という方向を辿つており、人口制限のための原始的な共同社會的强制力はそれだけ弛緩してゆく傾向を拒み難い。蓋し社會の進化は私經濟の發達と相表裏しており、そして社會的必要に基く社會的要請も亦直接かつ無條件的な共同社會的强制に替つて個人の自由なる意思とその決定を媒介とする間接的な作用が支配的なものとなつてくるからである。しかしそのような社會の進化、經濟の發展は、原始共產社會の解體以降、社會成員の階級的分裂とその强化を現實の槓杆として推進されてきたもので、指導階級の代表する社會的必要は、かかる階級的構造を介して、被抑壓階級に對する經濟外的强制として强要されるのを通例としている。特に社會的生產力の停滯化する場合、この階級的構造は專ら個人の自由を制肘する社會的壓制として機能する。中期以降の封建社會はその最も典型的なものの一つで、就中その人口現象はそういう封建的壓制を最も集中的に表現するものであつたといつてよい。人口の大部分を占めていた農業人口中の決して尠くない部分の者どもが家住みの獨身下僕として人口增殖の圏外におかれていたことは周知のことであるが、零細な耕作農民たちも亦封建的な搾取と土地への擒縛下にあ

つては、自ら生きるために、墮胎間引きによる產兒數の自制を餘儀なくされていた。いゝかえれば、經濟的生活力の弱い下層階級に降るにしたがつて人口の制限はいよ〳〵強く強要せられていたわけで、それは生產力の封建的停滯が必要とした封建社會の社會的至上命令であつたといつてよいのである。にも拘らず、個人の自由は私經濟の發達に歩を合せて普及する傾向を辿つており、特に都市の發達に伴う農村過剩人口の流亡は、下層民の非合法的性交と共に、封建社會にとつてはかくれもない末期的現象として現われていた。要之、封建的壓制をもつてする社會的統制の力もそれだけ弛緩していたわけであり、原始社會に想像される共同社會的强制の力とは確かに較ぶべくもなくかゝ弱いものであつたことになる。封建時代に特有なたび〳〵の大飢饉や悪疫の蔓延による人口の暴力的破壞をもこの社會的人口統制力の弛緩に代つて現われざるを得なかつた當然の結果だと考える上記カア・ソンダースの意見には因果聯關の躁急な飛躍を指摘せざるを得ないが、しかし廣大な人口史觀的展望にとつてそこに一つの緊密な相應關係が存在することを否定することはできまいと思う。

しかし又、封建社會の埒を踏み越えた餘剩人口の發生は、既に新しい世代の萌芽的生長を實證する事實でもあつた。封建社會にとつての悲慘な末期的現象は近代社會の生成のための悲痛な胎動であつたといつてよい。近代社會の生成を跡づける歴史的標識は凡ゆる點において舊い社會的制縛からの人間の解放になければならぬ。それは一般の社會經濟生活におけると同じく、その性生活においても亦指摘されねばならぬ。そして個人の解放が早期資本主義的、商品生產者的社會の社會的生產力の基盤として不可缺の社會經濟的前提であつたとすれば、性生活における社會的制縛からの解放は人口をその封建的停滯性から解放して近代的產業人口を育成するために必要な當然の前提であつた。西歐の近代先進諸國において下層人民大衆の結婚に對する社會的制肘力が弱體化し、之に伴い出生率の近代的な上昇傾向が明確に推定せられるのは十八世紀においてであるが、これこそ重商主義的人口諷歌思想をその名づけ親として生まれた現實の子であつた。生まれた子はその名づけ親の期待にそむく相貌を現わしかけてはいたが、しかしそれが新しい世代を繼ぐべき嫡出の子であつたことは疑いない。それが健全な生育をとげて歴史上未曾有の近代的人口膨脹を實現するのは十九世紀のことであり、かつこの十九世紀的人口增加はその動因を出生率の上昇よりも寧ろ死亡率の低下に負うているといつてよいが、しかしこの近代的人口增加は既に早く出生率の近代的な上昇によつて準備せられていたということを、特に近代人口問題の史的本質を理解するために、無視することができない。いゝかえれば、個人の自由と解放の精神が特に下層人民大衆に對する結婚制限の廢棄となつて實現されたところに近代的な出生率上昇の事實は生まれ、近代的な人口增加の根本は据えられたのである。それは社會的生產力を異常に擴大せるのみならず、また不斷にこれを擴大再生產しゆくことによつてのみ自己自身を保全しゆくところの近代資本主義的生產方法を現實に充足し擔當してゆくための生きた基體の誕生をいみする。自由と解放とは決して單なる精神史的標語ではないのである。

三、近代社會の生成途上における人口問題の推移、產兒制限が近代市民階級の實踐的イデオロギーとして成り立つまで

自由と解放とは確かに單なる精神史的標語ではない。だからこそ又その達成にはそれだけの迂餘と曲折が必要であつた。そして個人の自由と解放

とを標語とするこの社會革命を實際に成就し完成したものは産業革命を機緣とする新しい階級分化の生成とその進行であつた。いいかえれば、人間をその封建的制縛から解放した現實の力はこの近代産業資本の生成とその自由なる活動であつたのである。だからこそ、解放された下層人民大衆の自由な人口增殖力は既に早くから同時に新しい社會問題として立ち現われざるを得なかつた。人口增加を要望し禮讃した重商主義時代の人口思想の中に既に深刻な懷疑の跡の散見せられるのもそのためであるが、時代が要望したものはもと〳〵單なる人口一般の增加ではなかつたのである。そしてこの近代的人口增加の眞相を最も赤裸なる姿の下に映し出し、深刻な社會問題として出現させたものが産業革命と之に表裏する社會革命の進行であつた。十八世紀末のイギリスにおける所謂「貧民問題」に窺われるように、人口增加の事實もその量的規模においてはとりたてて問題とするほどのものであつたわけではない。たゞ新しく生まれた近代産業資本は解放された人口を新しい生活基盤の上に定着させるだけの十分な力をなおもつに到らず、人口の近代的解放は專らその傳來の生活基盤からの追放をいみするに過ぎなかつた。そういういみで所謂「貧民問題」とはこの近代的解放過程の中に沒落しゆく小農民や手工業者たちの生存權にかゝわる社會問題に外ならなかつたといつてよいが、しかし又そこに近代人口問題の史的本質は却つて一層明瞭に、露骨に、直截に、少しの粉飾もなく表現されているということもできよう。社會革命の過渡期に通有な混亂はその後の軌道につつた近代社會の發展につれて解消せられたし、生活空間の劃時代的な擴大過程は史上未曾有の人口增加を可能にしたばかりでなく、その一般生活水準を不斷に上昇させてさえきたといつてよいが、しかもなお何らかのいみで過剩人口問題の再燃するところ其處には必ず階級分化の新しい進行と發展とがあり、そしてかゝる階級分化の發展とその葛藤とを離れては近代人口問題の本質は之を捕捉するに由ないといつてよいのである。

當時の所謂「貧民問題」、沒落しゆく小生産者階級の反抗運動を直接の史的素材とし、大陸におけるフランス革命の進行に對するイギリス支配階級の恐怖と反動とをその思想的背景として立論されたマルサスの人口論がその根本的志向において支配階級の利害を代辯するものであつたことは周知のことで、特にその自然主義的な理論構成がかゝる階級的利害と表裏相應するものであつたことも亦一般の承知するが如くである。過剩人口を人爲を超えた自然生物的な傾向として取りあげることは之を支配階級の責任と負擔とから解放する所以でもあつたわけで、その反動的な性質は異論のないところであろう。しかし又、産業革命のなお緒についたばかりの近代資本主義は自ら解放した過剩人口を新しい近代市民階級にまで再編成する力も豫測ももつていなかつたし、他方この解放過程の中に過剩化していつた人口層は古い封建的制縛から解放されたまゝ新しい時代の社會的要請に順應するだけの智能も教養もまだ身につけることができず、動物的本能的な增殖力によつてその新しい存在を主張し告示する以外の生き方を知らなかつたともいつていゝ當時の客觀的狀勢下にあつては、マルサスの人口論はまさしく時代の問題を外觀的には最も正確に表現したものといつてよく、そこに近代人口問題の理論的取り扱いにおける最初の出立點として沒すべからざる意義も亦あるといえよう。立場の階級的反動性も、又その理論の自然主義的結構も、新しい社會的强制の下に生み出されたばかりの勞働者階級のそのような實情を闡明するには却つて最も正鵠適切な前提でさえあつたということもできる。たゞ近代人口問題のその後の推移はこの新人口階級の實情とその歸趨如何にかゝつているといつてよいと思う。

産業革命を經過した近代資本主義のその後の飛躍的な發展は、人口收容力の劃時代的な擴大に成功し史上未曾有の人口膨張を可能にしたと同時に、また一般大衆の生活水準を不斷に向上させることによつて露骨な階級的對立を緩和するに十分であつた。そして嘗ては動物的な生活最低限に放置された勞働者階級を近代的小市民の生活水準にまで向上させ教化するに到つたことこそ近代資本主義がその經濟的必然性によつて達成した最も大いなる史的成果の一つといつてよいものである。近代的自由と解放の理想はこゝに一應の足場を打ちたてたともいつてよいわけで、近代人口問題の史的推移にとつてもその影響するところは極めて重大である。蓋しそれは一般大衆を自由なる近代市民として新しい社會經濟的必然性の中に自發的に參與せしめる所以であるからで、特に個人の自由と責任とに委託された近代的人口增殖力を近代社會の社會的要請に順應せしめるための最も近代的な制縛の成立を意味するといつてよいのである。近代社會の提供する社會的福祉を分有しようがために行われる近代的産兒制限の社會的前提はここに始めて實現せられたといつてよく、そして嘗ては寡頭支配階級の立場から構成されたマルサスの人口論は今は寧ろ廣く近代市民階級の、特にその行動的性格においては所謂「小市民」的階級の現實の生活利害と結びついたところの勤勞大衆的イデオロギーとして繼承し發展せられることになる。マルサスの人口論が十九世紀を通じて、そしてなお今日に到るまで、その理論的權威を持續している根本の理由は現代社會がなお資本主義的階級對立を脱却しないのみならず、その對立分化を更に一層深刻化し普遍化しつゝあるところにあるはいうまでもないが、しかし又マルサスの人口論が廣く近代市民階級の實踐的イデオロギーとして繼承し發展せらるゝに到つたことも亦これに劣らず見逃し難い重大な意味をもつていようと思う。

所謂「新マルサス主義」の主張と運動とは、つまりはかゝる社會的背景と階級的基盤の轉移に伴うマルサス理論の新しい適應運動であつたといつてもよく、それが近代的産兒制限運動の最も自覺的、典型的なる表現である所以も亦そこにあるといえようかと思う。

要之、近代的産兒制限の思想が近代的自由解放運動を完全するその一環として成立するまでには近代資本主義の發展を前提とする叙上のような迂餘と曲折とがあつたわけで、それは近代社會がその社會的要請を個人の自由と責任とにおいて貫徹するために支拂わねばならなかつた當然の犠牲であつたということもできよう。個人の自由と解放とは社會的結合の廢棄をいみするどころか、寧ろ却つて最も緊密完全な連帶的作用の成立を前提とするのである。嘗て先史原始民族の間に貫徹されたと推定される共同社會的強制に基く人口制限は、社會進化の基本的動向に隨い、こゝにはじめて個々人の自由の意識と責任觀念とを起動力とする自由にして自發的なる人間的行爲にまで洗練せらるゝに到つたということもでき、そこに人口制限行爲の近代的形態たる所謂「産兒制限」の思想と實踐との深い歴史的な意義と存在理由とはあるのだといつてよいのである。産兒制限に隨伴するさまざまの利害得失の如何にかゝわらず、その根本を貫く右の如き史的存在理由は斷乎として否定し難い意義と價値とをもつている。それは近代合理主義の精神を特に性生活の上にまで貫徹することによつて生活の合理化を完全する所以のものであり、そういう意味でまさしく近代市民の近代的教養の程度を測る尺度だとさえいつてもよいのである。近代社會の提供する文化と福祉の恩惠にあずかることの多い上層階級に昇るに隨つてその出産力が遞減してゆくという、嘗て封建社會におけるとは正反對の、近代社會特有の社會階級別差別出生率はこのことを實證するに遺憾ないものである。

且つこの近代的差別出生率の實態に關する各般の人口統計學的解明はそれが生物學的乃至生理學的な理由よりも寧ろ社會心理的、有意選擇的な理由に因するものであることを示しており、産兒制限行爲がその主動的役割りを果していることを理解せしめる。特に産兒制限を主題とする統計中最も最新かつ大がかりのものであつた北米合衆國におけるパールの集計結果は社會階級別の差別出生率が完全に産兒制限の普及度と相對應し、かつ産兒制限を實行せざる者の間には社會階級別に何らの生物學的乃至生理學的な差異を認め難いことを示しており、近代的差別出生率と産兒制限との表裏不可分の一體的關係を解析して遺憾ない。

四、産兒制限の普及に伴う新しい人口危機の發生

産兒制限の思想と實行とが近代市民の近代的教養として大衆的普及をみるためには、叙上の如く、近代資本主義の發展に伴う一般生活水準の向上が不可缺の前提であつた。それはたゞ自らの勞働力のみを唯一の商品として市場に賣らねばならぬ勞働者をも同時に一個の近代市民として生活し意慾し思念せしむるに足る生活水準を保證するものでなければならぬ。近代資本主義の發展は確かにそれだけの仕事をなしとげたといつてよいわけで、かゝる生活水準の向上こそ更に一層の人間的向上の意慾を培養しその私生活を合理化しようとする努力を強化するのである。併しながらその大衆的普及については、そのような近代社會の光明面と表裏して同時に進行しつゝあつた大衆生活の新しい苦惱をも併せ觀察することを忘れてはならぬ。一般生活水準は確かに向上したし、大衆の勤勞所得はそれだけ上昇したには相違ないが、かりに所得の上昇が一般生活水準の向上に過不足なく順應し得たとしても、生活水準の向上は新しい生活欲望への刺戟を通じて近代的意味における新しい生活苦の思想を培養するに十分である。特に貨幣經濟の浸透はそういう生活意識をいよ〳〵鋭いものにする發條であり、資本主義經濟に不可分な景氣の變動はこれを近代市民に特有な生活不安の心理にまで驅り立てる。のみならず、近代資本主義の發展は十九世紀の概ね八〇年を境として帝國主義的發展への道を辿りはじめた。それは國内市場が資本家的利潤の源泉として既に飽和狀態に近ずけることを意味し、海外市場における獨占的利潤の獲得が國民大衆の一般生活水準の向上よりも一層資本家的關心の對象とならざるをえなくなつたことを意味する。帝國主義的利潤が資本主義經濟に新しい繁榮を齎らしたことは疑ひないが、この發展に伴う資本主義的生産方法の技術的高度化がその分配關係の上に著しい變化を齎らしたことも亦無視することができない。要之、資本主義經濟の信條である不斷の擴大再生産傾向の緩慢化と、之を補償するその帝國主義的段階への移行とが共に相俟つて國民大衆の生活を狹隘化し、その近代的な生活不安の意識をいよ〳〵深化させるに到つたであろうことは異論のないところである。産兒制限の思想とその實行との大衆的普及がこの資本主義經濟の轉換期と平行して本格的な足どりをとり始めたであろうことは容易に想像しうるところである。イギリスにおける産兒制限思想の大衆的普及に最も效果があつたといわれる一八七七——九年の所謂ブラツドラフ・ベサント事件はそういう意味で特に象徴的であり、そして西歐先進諸國の出生率は概ね七〇年代の末期より緩徐なる低下の傾向を示しはじめているのである。最初は專門學者をも半信半疑の狀態においたこの出生率の低下傾向は爾後かわることなく進行したのみならず概ね世紀の轉換を境としてその速度を一層加速度化し、この出生率の恒常的な低下傾向は近代人口問題の一つの中心問題として新しい關心をそゝるに到つた。封建

的制縛の解體に伴う出生率の近代的上昇をもつて始まつた近代社會はこゝに出生率の恒常的な低下傾向という人口動態上劃期的な新段階に入つたわけで、産兒制限問題の人口理論的省察も亦この事實の究明を離れては萬全を期し難いのである。

尤も近代文明の恩澤の一つであり前世紀末葉以降特に著しい死亡率の低下傾向はこの出生率低下を相殺してなお餘りがあり、史上未曾有の人口增加を實現するに不足はしなかつたが、しかし死亡率の低下には一定の限度があり、依然たる出生率の低下傾向は早晩この人口增加をも停止させ、そして逆に人口の減少過程を餘儀なくするであろうこと、そしてたとい出生率の低下もある程度で停止するものとしても人口は獨立の生活體たる力を喪失する程度にまで加速度的な減少過程を辿らざるをえないであろうことが人口統計學的必然性を以つて推定せらるゝに到つた。近代人口問題は過剩人口の杞憂から人口の生物學的破産という新しい妄念にとり憑かれたわけで、特に第一次世界大戰以降今次大戰の勃發に到る間この近代的人口危機の思想は各國の人口學者の汎く主張し心痛するところであつた。尤もこの人口危機說の强調は第二次世界大戰必至の豫感を背景とする各國の帝國主義的關心を多分に織り込んだものであつたことは否定し難いが、出生率の恒常的な低下傾向と、それが近い將來に必然化する人口の急激な減少過程とは否定し難い事實であつた。のみならず、今日の文明諸國の低出生率が既に人口の單なる再生産に必要な程度をも概ね下廻つており、これらの諸國が今日なお多少の人口自然增加を示しているのはたゞ〳〵過去における人口增加の餘澤、いゝかえれば壯年層人口の比較的多い特殊な人口年齢構成の結果に外ならないものであることは人口統計學的に周知の事實なのである。從つて、それが謂うところの人口危機を必至化するか如何かは懸つて出生率低下傾向の今後の歸趨如何にあるわけで、それは又そのまま産兒制限の思想と實行の大衆的普及の傾向如何と不可分の關係をもつている。

そも〳〵一口に出生率というけれども、總人口を基準にして計算された出生率とは一つの統計學的抽象であつて、現實に存在するものは社會階級別に異なる差別出生率であり、そしてこの社會階級別差別出生率が近代市民的教養の一つである産兒制限の普及度に相應するものであることは既に上段といてきたところである。それ故に、人口の再生産にも不足し勝ちな現在の出生率とは、上層乃至中産階級の過少な出生率が下層階級の高出生率によつて辛じて支えられている補償の結果であつて、この近代的教養の大衆的普及が總出生率を更に破局的な低位にまで低下させねばやまないであろうことは極めて自明のこととといわねばならぬ。しかも産兒制限の普及は一般生活水準の近代的進化と上昇を前提とすると共に、又これに伴う近代的生活不安の强化をその直接の起動因とする。そういういみでは經濟的に弱い下層階級における産兒制限の普及は、單に上層階級の跡を追うばかりでなく、更に一層その必要度を强くするということもできるわけで、近代社會に特有な社會階級別の差別出生率は單に上から下に均等化するのみならず、劃期的な逆轉の可能性をさえ孕んでいるといつてよいのである。既にスウェーデンにおける都市人口層の社會階級別差別出生率はそのような可能性が單なる理論的豫想に止まらないものであることを實證しており、そして同國の極端に低い人口再生産率はその他の各國の將來に一つの暗影を投げかけているといつてよいのである。要之、社會階級別差別出生率の存在は出生率の持續的低下傾向を必然化する槓杆であり、所謂靜止人口なるものはこゝにおいては一種の理論的抽象に過ぎないといえよう。そ

して與えられた人口收容力を前提として現實に達成された靜止人口とは恐らくその量的弱體性のために更にその人口收容力そのものを弱體化して人口の生物學的破滅にまで進まざるをえないであろうことを想像することはさして誇張に過ぎた豫測とはいえないと思う。少くとも社會經濟體制の上に劃時代的な變革のないかぎり、我々は人口統計學的必然性を以つてそのことを主張しうるわけで、その限りにおいては近代的人口危機といわれるものも亦正當なる理由をもつているといつてよいのである。そして近代市民の近代的教養として生まれた產兒制限が人口問題の上から更めて理論的省察の俎上にのぼせられねばならぬ理由も亦こゝにあるのである。

五、若干の產兒制限反對論の吟味、產兒制限問題における階級的利害の葛藤について

產兒制限禮讚論が近代市民の實生活と結びついた勤勞大衆的イデオロギーとして極めて明確自明な常識的說得力をもつているのに對して、產兒制限反對論は孰れかというと寧ろ不確定な內心の人間的心情に訴える本能的な反撥感情を據りどころとしており、そういういみでその理論的說得力は弱いのが普通である。すでに人口史的展望は產兒制限の歷史的意義と存在理由とを確證するに十分であつた。產兒制限の普及に伴う新しい人口危機の不可避性が人口統計學的に確認されたからといつてその歷史的意義と存在理由を無視しうるわけのものではない。問題は寧ろそのような人口統計學的認識を更に一步踏みこえたところに、いゝかえればそのような必然性の成立する實在的諸條件を分析することによつて進んで近代社會そのものの史的本質を反省するところになければならぬ。大いなる史的成果の實現される實際の道具だては必ずしもそのすべてがその成果に相應しいものではない。そして新しい人口危機の必然性が產兒制限に對する深刻な疑義と異論とを提出するに足るものとすれば、そのような理論的反省はいよいよ切實な關心事でなければならぬ。我々はこの近代市民的教養の利害得失の岐るゝところを進んで近代社會の社會經濟的構造聯關と、とりわけその社會階級的對立分化の進行の中に分析し解明することによつてのみこの疑義に答えこの異議を正當化することができるであろう。世上通例の反對論は、それが一見いかにも純論理的な觀點を固執するにもかゝわらず、實は却つて特定の階級的利害をその立論の背景にもつているのを否定し難いようである。

一例として國民經濟學的觀點よりする反對論に一瞥を投ずる。產兒制限の普及に伴う人口減少の傾向が當然に消費の減少を伴い、國民經濟にとつて不利であることを說くのもその一つであり、特に幼少年人口の減少が逼迫せる需要の減退を惹起し、國民經濟上無視し難い惡材料であることを力說するのは之ら論者に通例の見解であるが、しかし未成年人口は自ら購買力をもつているわけではないし、そして子供のために當てられていた購買力は當然にその親たち自身のよりよい生活のために振りむけられる十分の可能性がある。惣じて人口の減少に伴う消費者數の減少を補償するものはこの生活水準の向上であり、しかもこの生活水準の向上こそ近代資本主義經濟の發展と表裏するその原則的な方向の一つであり、近代社會の史的使命の一つでもなければならないのである。が人口減少の國民經濟學的弊害を消費の減退によりも寧ろ生產力の一要因たる勞働力の減少に指摘する論者もある。そのいうところは主として勞働力の減少に伴う勞賃の騰貴が資本家的經營を困難にし、ひいては國民經濟全體にとつて致命的な結果を招來することを論旨としているようである。が勞働力の減少と勞賃の騰貴に

ついては生産方法の機械化による補償があり、かつ機械化による資本構成の高度化こそそも〳〵資本主義發展の本則をなすものでなければなるまい。從つてもしこの反對論に更に何らかの據りどころがあるとすれば、それは資本家的採算を超えた資本構成の高度化を忌避する資本家的利害を背景としているわけで、特に外國市場の帝國主義的獨占に高利潤の道が殘されていることがこの資本家的忌避をいよ〳〵强固なものとする。從つて經濟學的なこれらの反對論も結局は帝國主義的利害の理論的粉飾たる以上のいみをもつているとはいゝ難いようである。

純理論的な立場を標榜する別種の有力な反對論は社會優生學的觀點よりするもので、純生物學的な觀點を强く前面へ押したてゝいるのがその特徴であるが、その反面、歷史社會的法則の特殊性に對する認識の狹隘さが却つて常識的な政治的先入見と妥協するような結果となつているのが通例のようである。例えば産兒制限に伴う生存競爭の緩慢化が人類進化の退歩をみちびくと考える所謂社會ダーヴイン主義的主張の如き、自然淘汰と社會淘汰、生物進化と社會進化の相違を無視するところに根本の難點があるといつてよいが、そのような生物學的反對論の一變種として今日特に有力なものは社會優生學的觀點からする反對論で、一應社會科學的な問題に關心をよせているところに寧ろ一層危險な陷し穴があるということもできる。彼等は現在の社會階級別差別出生率を據りどころとし、それが上層階級に特に强い産兒制限の普及度に相應するという事實から、この人爲的人口制限に基く人口の質的退化の必然性を結論する。前段國民經濟學的觀點からは勞働人口の減少が憂慮せられたが、こゝでは反對に社會的上層人口乃至は中産知識階級人口の相對的減少傾向が問題の焦點にとりあげられてくる。産兒制限運動が社會の改良と人間の向上を理想としている以上その反對論としては更に適切にその逆説的效果をついたものともいえようが、しかしそれが現存社會の社會階級的分化を生物學的にも最も自然かつ合理的なものと考えている點においては現存支配階級の立場を代表しようとしているものである點に少しの變りもないのである。のみならず、史的展望を更に一歩深くするならば、人口の社會階級別構成の間には不斷の人口交流があり、しかも社會的下層階級よりする指導階級人口の絶えざる血の補給こそ健全なる社會進化の表徴でもあつたし、且つまた純生物學的にも首肯しうるところの健全なる生命の代謝機能であつたといつてよいのである。近代社會の生成期に所謂第三階級が舊貴族階級の階級的指導權を奪取するに成功した頃、この新興階級の文化的な卑俗さと人間的教養の不足とが如何に舊貴族階級の顰蹙を買つたかは當時のフランス・ブルジョワ婦人を活寫した名匠バルザツクの筆にも詳しい。しかも近代社會とその文化の發展がこの粗野で卑俗な新人口階級の子孫によつて實現されたものであることは附言するにも及ぶまい。社會的下層階級における個人的教養の不足はその社會の負うべき罪であつて、生物學的資質にその主因を歸すべきわけのものではないのである。

惣じて階級的偏見の介入は道德的論議のもち出されるとき最も著しい。産兒制限に對する反對論の一つとして屢〻主張される國民道德的觀點からする批難も亦その例に漏れないようである。避妊行爲が行爲の結果に對する責任を回避するといういみで無責任な非道德的行爲であるという批難はそのかぎりにおいて異論はないが、しかしそのような責任の回避も實は一層深刻な責任感から出發するものであるのが近代産兒制限の本旨であるわけで、生の全幅的な享樂と冷徹な合理的精神とを一個の人格の中に矛盾なく統一しようとする獨特の工夫こそ近代人に特有な道德的努力の目標であ

るといつてよいのである。そして若し生の享樂が動物的な本能の充足に逸脱し、理性の行使が皮相な功利主義的打算の水準に停迷しているとすれば、確かに近代精神の病弊であるこの分裂と偏向とはその病根を近代社會そのものの階級的分裂の中にもつているもので、産兒制限の努力そのものは寧ろそのような分裂を一個の人格の中に統一しようとする悲痛な努力として生長してきたものとさへいつてよいと思う。それ故に、産兒制限の大衆的普及をその到らざる頽廢性のゆえに批難することは、嘗て動物的本能の充足によつてしかその生存權を主張する途をしらなかつた下層階級が近代市民として知的に啓蒙され向上することを拒否することであり、そして特に充ち足りた上層階級の中に替つて受けつがれたその享樂主義的再現を痛心することでなければならぬ。新しい道德は新しい矛盾と葛藤の中から生まれねばならぬ。勞働者をも一個の近代市民として生活し意慾せしむるに到つた生成しつゝある近代市民大衆の立場に立つかぎり、産兒制限は動かすべからざる近代市民道德としての基礎をもつており、否定することのできない進歩的意義をになつているのである。

産兒制限問題に對するこれらの疑義と異論の一瞥は問題の核心が深く近代社會の史的本質と不可分に絡みあつていることをまた更めて確認せしめる。すでに産兒制限の普及に伴う新しい人口危機への展望は近代社會そのものへの鋭い理論的反省を要望せしめざるをえないものであつた。もし産兒制限が動かし難い時勢の方向を歩んでいるものであるならば、その健全なる生長と大過なき普及のために、それは又いよ〳〵切實な理論的要望とならねばならぬ。近代社會の社會的要請として完成されるこの近代的教養はそも〳〵如何なる社會經濟的構造聯關と、從つてまた特に如何なる社會階級的分裂と葛藤とを現實の槓桿として貫徹されるものであるかを我我は更に多少とも立ち入つて分析するところがなければならぬ。

六、近代社會の人口法則と近代的人口危機の必然性について

一方には不拔の歴史的存在理由があり、他方には新しい人口危機への拒否し難い脅威がある。近代社會における産兒制限問題の虚實相表裏するそのような史的相貌はその推移を一貫する近代社會の人口法則から究明されねばならぬ。それは果して如何なる社會經濟的理由を根本の推進力とし、また如何なる社會心理的效果を媒介として貫徹されるものであるかを更に立ち入つて明らかにするところがなければならぬ。

近代社會は個人の解放と共にはじまり、個人の自由の中にその全生命力を豫託した。この自由は商品生産者としての近代小市民的自由であつた。産業革命を轉機とする近代的階級分化の進行は小生産者階級の沒落と、その勞働力を一個の商品として市場に賣らねばならぬ新しい勞働者階級の形成にこの近代的自由と解放の階級的本質を現實化した。この新しい階級分化を基軸とする近代社會の構造的變革過程が出生率の近代的解放を背景として發現させた特種の過剰人口現象の中にマルサス人口論の歴史的素材があり、又その自然主義的な理論構成を首肯せしむるに足る社會的病患としての不可抗的な深刻さがあつたことは上段すでに言及せるところであるが、そのような理論的表現を寧ろ格好のものとした事象の深刻さこそ、同時に之を近代社會そのものの史的本質と引きはなし難い法則的必然性の中に捕えようとする理論的反省をも亦不可避のものとしよう。そしてカール・マルクスが人口法則の歴史社會的制約性を強調し、この近代的過剰人口傾向を資本蓄積の法則から説明したとき、資本主義的過剰人口の必然性

はじめて資本主義的生産方法そのものの本質から究明せらるゝに到つたといつてよい。資本の有機的構成における不斷の高度化、不變資本部分の飛躍的な增大傾向に對する可變資本部分卽ち勞働者に支拂わるゝ勞賃總額の相對的な減少傾向は恒常的な過剩人口傾向を不可避のものとするわけで、しかもそのような恒常的な過剩人口、卽ち勞働豫備軍の存在こそ、低勞賃を利益とする資本家的必要からばかりでなく、景氣の變動を通じて飛躍的、突發的に發展せねばならない資本主義的生産方法に不可缺な一つの前提をなすものと考えられるのである。マルクスによつて始めて剔抉せられたこの資本主義社會の人口法則については勿論多くの反對者からの異議はないでもない。そしてその批評の概ね一致するところはそれが單に資本主義社會における失業人口發生の必然性を指摘するだけで、しかもその暗默の前提にはやはり勞働者人口の絶對的な、いゝかえれば人間生來の過大增殖傾向を前提しているという點に歸一するもののようである。乍併、人間的存在そのものが本來歷史社會的所産であり、人間生來の增殖力と考えられるものも亦つねに特定の歷史社會的形成作用を媒介とすることなしには實在するわけのものではない。そして資本構成の高度化、不變資本部分の飛躍的な增大傾向こそ、單に社會的生産力の飛躍的な增大によつて史上未曾有の近代的人口增加を現實に保證する所以のものであつたばかりでなく、特に近代市民を驅つて自己とその子孫の將來を安んじてこの社會の一般的發展傾向に信託せしめたところの現實の基礎でもあつたといつてよいのである。出生率の近代的上昇は單に近代市民が舊い制縛から解放されたがためではなく、乃至は新しく生まれた勞働者階級の無智と無教養とが生物的本能をほしいまゝにしたがためばかりとはいえない。それが個人的に自覺されると否とにかゝわりなく、そこにはそのような子孫の增加を保

證するに足りる全社會の一般的な發展傾向が共同の運命的事實として存在しなければならぬ。個々人の運命としてそれは如何に不確定なものではあつても、それだけまた共通な可能的事實として意識されるものがなければならぬ。資本の蓄積過程における不變資本部分の飛躍的な增大傾向こそそのような社會意識の社會心理學的背景を形成する現實の基礎であつたといつてよいわけで、それだけこの不變資本部分の增大傾向に對する可變資本部分の相對的減少傾向は資本主義社會における恒常的な過剩人口傾向を當然のこととせざるをえないのである。そして失業人口とはこの過剩人口の實體に對する近代的名稱以外の何者でもないわけである。尤も資本主義のその後の發展は一般生活水準の劃時代的な上昇を可能にしたし、そして特に勞働者階級をも近代的小市民の生活意識にまで向上させるに到つた。今日の世相は嘗てマルサスやマルクスが問題としてとりあげた露骨な階級的對立相と相距ること遠いが、しかしマルクスが指摘した資本主義的生産の基本構造そのものは今日と雖もなおその起動的推進作用を停止したわけではない。そして一般生活水準の上昇、いゝかえれば一般大衆の生活樣式と從つてまたその生活意識の近代化過程の進行と共に、過剩人口傾向を必然化するこの資本主義的生産の基本的矛盾は、又そのまゝ産兒制限思想とその實行とを普遍化し恒常化するところの起動的推進力として作用するといつてよいのである。蓋し社會的な富と福祉の躍進的な增大に對する個人の分有能力の相對的な減少傾向こそ近代市民を産兒制限へ驅りたてる根本の理由に外ならないからである。近代市民の實感する生活苦の意識は決して個人心理的幻想ではないのである。

要之、一方には社會的生産力の不斷の躍進的增大傾向があり、社會的富と福祉の絶えざる增進があるばかりでなく、一般生活水準も亦不斷の上昇過

程を辿つてはいるが、しかし他方一般大衆の生活水準はその不斷の實質的向上にもかゝわらず社會的富と福祉の增進傾向に對して相對的には却つて減退傾向を辿らざるをえず、その生活の實質的向上に比例して却つてその缺乏意識を强くせざるをえないのである。そこに資本主義社會に本質必然的な矛盾があり、近代社會における人口現象とその推移も亦この基本的矛盾とその史的展開の中にその根本制約をもつているものでなければならぬ。近代的階級分化の進行はこの基本的矛盾を展開し貫徹するための現實の槓杆であつたわけで、その史的展開におけるさまゞ〳〵の諸相面はこの明暗虛實の互に表裏錯綜した基本的矛盾の展開運動としてその眞意を捉えられねばならぬ。そして產兒制限の大衆的普及と從つてまた產兒制限問題の人口問題としての重大化とは、資本主義の發展が勞働者をも同時に近代的小市民の生活意識にまで向上せしむるに足るほどに一般生活水準の上昇に成功しえたところ、しかも資本主義はその信條である生產力の躍進的な增大傾向を維持するために帝國主義的な發展段階への轉換を餘儀なくせらるるに到つたところに始まり、その進行と共に深化するのである。

事情右の如くであるとすると、產兒制限の大衆的普及に伴う出生率の低下傾向は資本主義社會に本質必然的な過剩人口傾向を緩和する效果はあつても之を解消するものではなく、そして人口統計學が將來に推論する加速度的な人口減少過程の進行も、之を解消するよりは寧ろ一個の社會經濟的生活體としての人口の總體的力量を狹隘化することによつて却つて之を强化し深刻化する十分の可能性をもつている。そして過剩人口傾向を持續し且つ深化しながら急速な人口減少過程を辿ることを我々は本格的な人口危機というのである。その社會經濟的構造と、從つてまたその社會心理的相貌の中に劃期的な變革と轉化のないかぎり、近代社會はそのような人口危機への突入を單なる杞憂として無關心でいることを許されないのである。

深い歷史的意義と社會的必要とから生まれた近代市民的教養としての產兒制限が同時に胎藏しているそのような危機的胚種はこの產兒制限行爲そのものにおける頽廢化的形相として既に今日その一端を指摘するに不足しない。生の歡びの全幅的な享受が生活合理化の精神と共にこの近代的教養の一前提をなすものであることはすでに前段言及せるところであるが、それが特に今日の上流乃至中產知識階級層において特殊の階級的教養に粉飾された享樂主義的行爲へつよく傾斜しつつあることはまぎれもない事實である。と同時に又それに伴い、產兒制限の思想は非合法的な墮胎行爲を必然的な隨伴現象として發生させる。近代的教養の階級的未成熟のために特に下層階級に慣用される墮胎行爲は、その頽廢的爛熟の結果としても亦その處をかえて發生することになる。そしてそのいずれも近代社會の階級的分裂にその根底をもつている。惣じて近代精神の構造的支柱である自由の意識と責任の觀念がその相互補足的な構成から游離され、生きることの自由と歡びとが享樂主義的傾向へはしり、自ら生きるための合理的精神が皮相な功利主義的打算の水準に停迷し勝ちなのも亦この階級的分化と分業にその根をもつているといつてよいと思う。近代市民が當然に自負してよいその合理主義的精神と生活態度とは、產兒制限の思想と實行とにおいて最も象徵的であるが、その達成には又それだけ危險な困難に當面しているといつてよいのである。そして現實の階級的分裂は本能を合理的に支配し淘冶するよりも、寧ろ本能と理性を分離させ分業化させる。本能の中に宿る叡智としてよりも、寧ろ本能と對立し鬪爭し妥協する近代合理主義的精神の通弊も亦そこにあるといつてよいのではないであろうか。特に產兒制限問題に關連して杞憂せられる最大の疑念と不安も亦この近代合理主義的精神の

近代的局限性の中にあるのである。

以上論ずるところは近代社會の史的本質を極端にその消極面から取りあげた憾みがあるかもしれない。確かに近代社會の階級分化がその階級的葛藤を通じてなしとげた大きな史的成果は、之を人口現象の上からだけ眺めても、偉大な歴史の攝理を想わしむるに十分なもので、産兒制限の事實そのものが又その最も格好の例證でさえある。たゞ我々の問題とするところはその成しとげられた成果よりも寧ろそれが今後になすであろう仕事の如何にかゝわる。いゝかえれば、我々は好んで消極面をとりあげるというよりも、寧ろ近代社會の基本的な運動法則を明らかにすること、そして人間的意志の干渉なしに進行する場合のその自然必然的な推移を明らかにすることが目的なのである。問題の理論的省察はそのような理論的抽象と法則的必然性の認識から出發せねばならぬ。そして又そのかぎりにおいて我々は近代社會における人口危機の必然性を、社會經濟學的にも、また社會心理學的にも、承認せざるをえまいと思う。

七、將來社會主義社會における人口の推移について、社會主義的人口論の吟味

資本主義社會における新しい人口危機發生の理論的可能性を確認すること、とは、その理論的含蓄を更に一歩進めていうならば、この近代社會の史的本質を人口問題の立場から鋭く反省し吟味することでなければならぬ。蓋しそれは嘗て封建社會における封建的停滯人口の近代的解放に成功し、且つ之を自己自身の生長發展のための實體的基盤として生長してきた近代資本主義が、少くともこの實體的基盤の保全涵養の力においては、どうやらその歴史的な存在理由を喪いかけているのではないかを思わしめるからである。技術の不斷の進歩と表裏する生産のための生産、そして資本の蓄積を第一義的信條とする資本主義的生産方法が、事實において人間自身の生活とその福祉とを如何に豊かにしたとはいえ、そこにその第一義的な目標をおいていたものでないことはいうまでもないことで、我々の今日焦慮する人口問題はまさしくこの事實を近代社會そのものの死活問題として提起するものだといつてもよいと思う。既に早く十九世紀初頭に、新しい資本家的富の登場が勞働者階級の窮乏と、更にその多産のための一層の窮乏化に、一言にしていえば資本主義的過剰人口の事實に鋭く對照されたとき、この新しい生産方法の自由主義的放任に抗議したのはシスモンディであつたが、人口問題は勞働者階級の貧困と多産に基く過剰人口の問題としてここに始めて現存經濟秩序に對する抗議の出發點となつたばかりでなく、とりわけてはまた「富を人間から抽象した」古典經濟學に對する抗議の中心的論據として取りあげらるゝに到つた。尤もシスモンディを驅つてこの抗議を提起せしめるに到つた彼自身の思想的立場は、新興資本の威力の前に沒落しゆく小ブルジョワジーの懷古と反動とを據りどころとしたもので、これら小市民階級においてのみ人口の自發的な自制と調節は可能であつたと考えた彼の懷古的、浪漫主義的理想は、實際には却つて新しい資本主義の更に一層の發展を通じて眞の近代市民的教養の一つとして實現せらるゝに到つたことになる。しかもこの近代市民大衆の一般的教養化した産兒制限が今は新しい人口問題を新しい人口危機の問題として提起しているわけで、人口問題の立場からする資本主義への抗議と批判とはそれだけまた深く且つ廣い史的展望の上に立脚したものでなければならぬ。

シスモンディが小ブルジョワジーの立場から行つた抗議の精神を今日の一轉せる人口問題の主題として繼承するものはマルクス主義的社會主義者

の一群である。そして謂うところの危機の本質が上段とくが如く現存社會の階級的分裂に根ざすものである以上、將來社會主義社會における階級對立の解消がこの人口危機を回避するに必要な基本的諸條件の一つであろうことは當然のこととしてよい。が社會主義者が好んで力説する將來社會主義社會における新しい人口の推移は生産力の再度の劃時代的な躍進に伴う人口收容力の再度の劃時代的擴大と、その結果として實現せられるに相違ない末期資本主義的な人口停滯の社會主義的解放、再度の著しい人口增加の映像である。試みにその代表的な論旨をカウツキー晩年の人口論著「自然と社會における增殖と發展」にとる。その說くところも亦この人口收容力の將來社會主義社會における劃時代的な擴大を强調することに最大の重點をおいている。曰く、我々が既に今日到達していながらその社會的利用を妨げている資本主義的制縛の廢棄は、特に今日その技術水準において立ち遲れており相對的には寧ろ後退的過程にある農業部面において、十九世紀における工業の躍進にも比肩すべき劃時代的な發展が可能となり、食糧餘力の劃時代的な增大が實現されるであろう。そして階級的對立と搾取の消滅は萬般の社會政策的施策と相俟つて死亡率を更に一段と低下せしめるであろうばかりでなく、人間生活を心身兩方面から自由にし健康化することによつて出生率をも亦上昇せしむるに相違ない。蓋し産兒數を制限せざるを得ぬ經濟的制肘が解除せられるとすれば、勞働時間の短縮、夜業の消滅、餘暇の善用等々に伴う生活革命は心身を健康にして出生率の上昇を結果するに相違ないからというのがその主張の要旨といつてよい。この出生率上昇論にはスペンサーに憑依するところの多いカウツキー獨特の生理學的解釋を前提としており、その點なお多少の論議の餘地もないではないが、將來社會主義社會の實情が果して社會主義者の豫約するが如くであるとするならばそこに劃時代的な人口增加の再現を想像することはさして無理なことがらではない。蓋し舊世界で人口增加を押えていた社會經濟的制肘が生産の面からも分配の面からも撤去せられるとすれば大衆的現象としての産兒制限はその社會經濟的强制力を喪うわけで、新しい社會經濟體制に順應する生活意識の變革がなお實現されないとしても、そこに著しい出産の增加が實現されるであろうことは極めて確實な確率をもつた事實だからである。或いは舊世界の生活意識がなお殘存し繼承せられている間こそ更に一層確實にそのことを推定してよかろうと思う。乍併、カウツキーも注意しているように、技術の進歩には際限がないとしても勞働生産性の向上には一定の自然的限界があり、特に技術の社會主義的利用は之を勞働生産性の向上によりも寧ろ勞働負擔の輕減にさしむけなければならないようになる限界點がある。いゝかえれば、將來社會主義社會においても亦その劃時代的な人口增加が過剩人口の杞憂をよび起すかもしれない理論的可能性はあるわけで、一般生活水準の社會主義的向上はこの可能性をいよ〳〵强いものにする。將來社會主義社會において豫期せられるそのような過剩人口傾向に對し、これを相殺すべき有力な反對傾向として豫期せられるものは、カウツキーによれば、社會主義社會において始めて完全に達成せられるであろう女性の解放である。それは上記農業革命とあわせて彼が將來社會主義社會の實現すべき二大事業の一つにかぞえているもので、女性の地位の向上と、特に社會的、精神的勞働への女性の參加は産兒數の自發的な制限をいよいよ强いものにするに相違なく、その效果は今日の資本主義社會が當面していると同じ人口減少の危險を再現させるかもしれないとさえ彼は考えている。たゞ社會主義的社會において始めて完全するであろう社會道德意識の發達向上がこの危險を防止するに十分であろうことを豫期して將來社

會主義社會における所謂人口問題の最後的な解決を主張するのが社會主義的人口論の代表作として相應しい上記カウツキーの人口論者の極めて樂觀主義的、理想主義的な論旨の大意である。

その強く倫理主義的な偏向については姑くおく。もし謂うところの女性解放がその仕事の上での男女平等化を基礎とするその精神的平等化を、いゝかえれば男性的、合理主義的精神の强化をいうものとするならば、近代合理主義精神の階級的な狹さと歪みとは撤去せられるとしても、惣じて、合理主義的精神に不可分な非女性的、反自然的ないしは沒感情的な傾向が全人類的な規模と深さにおいて立ち現われることになるかもしれない十分の危險がないであろうか。生物進化と社會進化の巧まざる協同の中に育成せられてきた男女の分業とその文化的感覺の分化の均等化が人間の生物學的自滅という異常な危險を惹き起しはしまいかを杞憂することは一つの理論的推理として決して論理的可能性に缺けたものではないのである。そして特に我々にとつて興味をひくことは、その新しい歷史的發生理由によつて確かに我々の今日杞憂する人口危機を解消するに相違ない將來社會主義社會においても亦その當初の劃時代的な人口增加が何時かは人口の生物學的破滅という同じ人口危機の發生を防止し難いということである。いゝかえれば近代資本主義社會が經驗したのと同じ人口現象の推移がこゝでも亦一層世界的な全人類的規模において經驗されるに相違ないということである。

將來社會の人口推移を豫測することは勿論萬全の科學的論證性を期待すべきことがらではないし、また我々の興味もそのような豫言者的言說にあるわけではない。寧ろそのような理論的推理が言わば一種の思考實驗として却つて現在の問題をより一層正確に分析するに役立つかどうかに我々の關心はかゝつているのである。そして將來社會主義社會においても亦その人口現象の推移は我々が經驗してきたものと同巧異曲の經過を辿るであろうというこの事實こそ、今日の人口問題の省察に當つても亦單なる社會經濟的分析の立場を超えた更に深い省慮を必要とするものではないかを反省せしむるに足る事實だといつてよいと思う。社會經濟的變革は勿論必要でもあり必至でもある。が人口問題はこの必要を必然化する行動的主體そのものの運命に第一義的な關心をおくものでなければならぬ。そのような關心は直接には自然生物學的な事實として最初の注意を惹くものであるかもしれないが、しかしそれが所謂自然法則的な事實であるだけ、それはまた同時に社會經濟的存在の中で人間的存在そのものの存在論的本質として不斷に存在し機能し反省されるところのものでなければならぬ。所謂人口危機の問題は我々を驅つて當然にそのような人間共同生活に不可分な共同の運命にまで反省することを餘儀なからしめるのである。

八、危機意識下の人口問題、歷史の進行に參劃すべき人口問題固有の立場はどこにあるか？

惣じて人間の營みは、それが偉大なものであるだけ、自己破滅的な危險と表裏している。謂うところの人口危機の問題についても亦その感慨をあらたにする。そも〳〵人口問題というもの自體がそのような人間的營爲の危機的性格と不可分に結びついているといつてよいのである。それは人間が眞に人間として、いゝかえれば單なる一生物的存在としての埒を踏みこえて、自ら自然の均衡を截斷しその生活空間を擴大しはじめたところにはじまるのである。自らその生活空間を擴大したればこそ人間は人間固有の增殖力を發展さすことができたのであり、そして過剩人口の危險も亦それ

と共に始まつたのである。人口問題は人間の歴史と共に古く、そして過剰人口問題は人口問題の歴史と共に古いともいえよう。が我々が今日當面している人口危機の問題、人口の生物學的衰亡に關する問題は、人間的營みの自己撞著的な危機的性格を表現する點においては、過剰人口問題よりも更に遙かに本質的である。それはよりよく生きようとする人間的努力がそのような行爲の主體そのものを全面的に否定するというようなことになる自己破滅的な危險を物語るものに外ならないのである。人口問題はそのような人口危機の問題として更に一層人間の存在そのものと不可分な宿題であることを自覺せざるを得ぬ。

それゆえに、社會經濟學的分析が人口危機の必然性を確認するところに、人口問題は却つてその問題意識を深め、人口問題固有の立場に立ち還るのだということもできる。必然性の認識は同時にまた人間的營爲によるその轉換の可能性をいみするものでなければならぬ。社會經濟的變革への要望は歴史的必然性の單に人間意識における表現に過ぎないものではない。それは全歴史の眞實の主體である人間自身の共同の運命として實感され思念され意慾されるものでなければならぬ。いゝかえれば常に特定の社會經濟的諸條件下に、從つてまた概ね何らかの社會階級的對立と葛藤の中においてではあるが、しかもそのような階級的偏向と僞善さの中においてもなお常に體驗されねばならない運命共同體的意識への主體的反省こそ、人口問題が眞に本格的な問題意識において成立する根本の立場に外ならないのである。そして近代社會における人口危機の認識も亦、近代資本主義の發展と之に伴う新しい階級的葛藤が近代社會に固有な運命共同體的主體そのものに抵觸し、寧ろこれを解體しようとする危險の發生をいみするものに外ならぬといつてよいと思う。

社會進化の基本的動向は、個體の解放、個人の獨立という方向を辿つてきたが、しかしそのような人間的個體の完成、いゝかえれば個體における自己目的的な倫理的存在價値の實現は個體相互の共同社會的結合を媒介として始めて可能なことがらであつた。そして人間個體をそのような自己目的的存在價値において取り上げるところに所謂過剰人口問題は始めて人口問題として成立する存在論的前提を與えられるということができるとすれば、謂うところの人口危機、或いは減衰人口の問題はこの人間個體の倫理的存在價値を保證すべき共同體的主體そのものの運命を問題の焦點に浮かびたゝせるということもできよう。人口の生物學的衰亡と考えられるものは常にそのような運命共同體的主體そのものの解體過程に伴う自然必然的な現象としてこそ人口問題本來の主題となり、人口危機の總括的な表現として我々の理論的識域に登場することができるといえよう。

人口問題の本質と、特に我々が今日當面しているその主題の意味するところが凡そ右の如くであるとすると、人口問題を專一に過剰人口問題の面からのみ眺め、人口推移の歴史を專ら人口制限の歴史として構成しようとする態度は少くとももう一つの見方によつて根本的な補足と修正を受けねばなるまい。産兒制限の功過を省察するに當つても我々はそのことをいよいよ痛感せざるをえないのである。

人口の歴史は、その表面的な經過においては確かに壓倒的に人口制限の歴史であつたし、前掲カア・ソンダースの主張するように史上時たまに採擇された人口增加政策も根本においては單に人口制限の多少の緩和に過ぎないとさえいうこともできよう。人間の本質をその動物的本能的な素材的自然の中に求め、從つて過大增殖傾向をその本質必然的な結末とする、一言にしていえば自然主義的な人口理論をとる限り、そのような史觀は當然

のことであるかしれない。が人間存在の存在論的本質をその歴史社會的な自己形成作用の中に求め、表面消極的な現象形態の中にも新しい力と積極的な規定の生成をみあやまることがないならば、人口の歴史はその内面的な意味と機能とにおいては同時にまた時代の推移に伴うそれ〴〵獨特な形態における人口涵養の工夫の變遷をいみし、人口を保全育成する仕方の變遷史として之を構成することもできると思う。そしてまさしくこのことこそ、さま〴〵の史的形態の中に繼承せられてきた人間共同生活の實體的基礎、運命共同體的意識にとつての根本の關心事であつたといつてよいのである。先史學者の考證するが如くであるならば、原始種族をその近親交情の生物學的弊害から救い、種族絶滅の危險から防護したものは婚姻關係における一定の禁制を中心とした新しい社會制度の生成であり、社會的動物としての最初の人間的自覺と自己形成の結果であつた。人口の自然增加も亦こゝでは歴史社會的な制肘を媒介として始めて可能であつたということができよう。歴史時代以降の史實は、特に階級分化の發展に伴つて、諸般の社會諸制度を強くその消極的な機能の面において示しており、家族生活の形態的進化の跡も亦その例に漏れるものではないが、しかし人口史上特に人口抑制的な力として機能した封建的家族制度は、他面においては、原始民族社會の崩壞以來おそらく最も充實せる運命共同體的意識の母胎として、人口の保全育成のために好適な制度であつたといえる。人口史上特に悲慘な史實に彩られている封建社會がその封建的停滯人口をなおよく持續しえたということも、單に封建農民の動物的な增殖力の所爲として片附けてしまえない問題を含んでいる。人口增殖力の根源を單に人間の動物的本能の中に求め、過剩增殖傾向を專ら人間的無智と無教養に歸するのは、社會關係の中に單に有意撰擇的な結合關係をしか見ようとしない近代合理主義的偏見の一つといつてよい。人間は單に社會經濟關係に規制せられる歴史の素材ではない。素材は素材自身の形相をもつていなければならぬ。そういういみで人口現象は、それが自然生物學的な象面を強くするほど、却つてより本質的な歴史社會的關係との聯繫を強くするのである。そして封建的家族制度の中に強く傳承された運命共同體的意識は、そこでは封建社會的狹隘性の中で悲痛な封建的過剩人口の母胎であつたに過ぎないが、人口をその封建的停滯性から解放した近代社會成立の裏にはこの狹隘性のゆえに苦惱してきた運命共同體的意識の自己再生への意慾を無視することはできまいと思う。そして近代社會における史上未曾有の人口增加も、新しく生まれた近代民族國家の國民的發展を背景としてこそ始めて可能なのであつた。近代社會とは寧ろ資本主義的生産方法の發達が新しい民族國家の建設に新しい共同社會的結合の主體を再生し得たところにはじまるのである。だからこそ、この近代社會が新しく擡頭した人口危機の問題は、われわれ近代市民の運命共同體的母胎に、いゝかえればわれ〴〵近代市民が時には明確な自負と熱情を以つて、また時には屢々全き忘却と無關心の中で、しかも常にその全生活を憑依させてきた民族と國家の運命にかゝわる問題として反省されなければならないのである。そのような主體的反省こそ人口問題を本格的な問題意識にまで立ち還らせる現實の力であり、そして人口問題が進んで歴史の進行の上に參劃し發言し得る所以の抑々の實在根據でもあるのである。そして人口問題の立場からこそ始めて正當に提起される産兒制限に對する疑義と不安とは、また人口問題がそれ固有の理論的立場に立ち還ることによつてのみ幾分ともその解決の途を方向づけられるものでなければならぬ。

九、民主主義的人口政策の指導目標

嘗て獨逸の社會民主黨内に當時漸く大衆的關心をえつつあつた産兒制限の是非が討議せられたとき、勞働者の産兒制限を勸奬して勞働市場の需給關係改善のための階級的鬪爭手段として利用せよという一部の聲が聞かれたことがあつた。その際そのような鬪爭手段の理論的な背理と現實的な非實現性とを指摘して之を斷乎として拒けたラツサールの態度は種々のいみで興味がある。蓋し勞働供給の減少と勞賃の騰貴に對しては資本家は十分の資本家的補償と對抗の手段をもつており、また勞働階級の强固な團結も産兒制限については完全な共同鬪爭を遂行しうる實際的保證に缺けているからというのがその提案拒否の論旨であつた。確かに産兒制限は廣く近代市民階級の市民的教養として生まれたもので、勞働者も亦一個の自由なる近代市民としてこの教養を身につけるのである。それは近代資本主義の發展が勞資の階級的對立の中に造りあげた廣汎な近代市民階級層を背景とする個人的教養の一つで、特に勞働者階級の階級的利害に奉仕するものではない。ラツサールの提案拒否は極めて當然のことで、階級鬪爭下にある勞働者階級の立場にとつては現在の産兒制限問題は全く無關心事でなければならぬ。がこの無關心は勞働者階級がその階級鬪爭に終局的な勝利と指導權を掌握しうるとの信念を前提としている。それは何よりも先づ今日の勞働大衆を産兒制限に驅りたてる經濟的窮迫が將來社會主義社會においては跡を絶つであろうとの社會主義通有の樂觀的未來像を根底としたものであるが、同時にまた階級社會の廢棄に伴う新しい運命共同體的結合とその文化的諸成果が總じて今日の産兒制限に纏綿する自己破滅的な行き過ぎの弊害を防止するに十分であろうとの確信をも物語るものでなければならぬ。そして我々が今日、今日の産兒制限問題について特に人口問題の立場から焦慮する最大の關心事も亦まさしくこの點にあるのである。社會主義者も遠い將來に恐らく配慮せざるをえなくなるであろうその問題を我々は今日焦眉の問題として取りあげなければならないのである。

我々は産兒制限に無關心ではいられない。寧ろその深い歴史的意義と、特に近代社會におけるその社會的存在理由とを全幅的に肯定せねばならぬ。たゞその大衆的普及の當然の結果として豫期せられる新しい人口危機の發生に關聯して特に人口問題上切實な疑義をよせざるをえないのである。

が産兒制限に纏綿する人口危機を回避する恐らく最善にして唯一の方途は、寧ろその眞實の意義と存在理由とを遺憾なく發揚せしめる以外にはあるまいと思う。それは近代市民の市民的教養として成就されたその意義と存在理由とをその深い精神史的な背景と含蓄とにおいて助成し完成させることでなければならぬ。そしてその成否は懸つてこの近代的教養の階級的基盤である廣汎な近代市民階級層が眞に近代國家の民主主義的基盤として、この近代國家の中にその階級的錯綜を超えた共同の運命を實感することができるような健全な發展を保證されるかどうかの一點にあるといつてもよいと思う。

いうまでもなく、この廣汎な近代市民階級層は典型的な小生産者階級から近代的勞働者階級に及ぶ多端な階級的構成をもつており、從つてまたその生活利害においても又その生活意識においても獨特の内的矛盾を包藏している。すでに産兒制限の思想と實行とがそのような近代市民に特有の内的矛盾を直接の推進力とするものであることはいうまでもないが、この矛盾を一つの新しい思想と行爲にまで統一し、一つの新しい文化的感覺にま

で洗錬した現實の力も亦無視することができまい。我々の杞憂するところはそのような文化的感覺がその内的矛盾のゆえに分解し頽廢化することであり、その健全なる發展が階級的矛盾と分裂のために阻害されることがないかどうかの點にある。

國家の人口政策は、それが眞に國民共同の運命を保證するものであるかぎり、根本において人口の保全育成の線を離れたものであつてはならない。その點においては今次大戰前に特に全體主義的國家群によつて遂行された人口增强政策さえ、その動機は別として、一粒の眞實さはもつている。それは全國民的な厚生運動として、乃至は國民所得の人口政策的見地よりする再配分組織への一着手として、確かに多分の進歩的意義を擔つていたといつてよい。たゞ之らの諸方策の最後的な目標である國民共同の運命の自覺をそれは帝國主義的戰爭のための手段としてしか取りあげなかつたところにその謬りがあつたといえよう。近代市民の自由な權利の一つである產兒制限は彼等の最も忌みきろうところであつた。近代國家の正常なる發展は寧ろ凡ての市民の自由にして合理的なる行動の中から生まれねばならぬ。たゞ全國民の自由にして合理的なる行動の中に、同時に國民共同の運命を完成せしめるに十分な共同社會の建設こそ近代國家の人口政策的指導が目標とする最高の標識とならねばならぬ。勤勞市民大衆を對象とした各般の社會經濟的諸方策はその不可缺の條件であるが、それは飽くまでも健全な共同生活の中でのみ體驗される人間的生存に對する健全なる文化的感覺の涵養、いゝかえれば近代的理性によつて洗錬せられた正しい人間的運命觀を保全し育成することを最後の目標としたものでなければならぬ。それがまた產兒制限をその皮相な合理主義的病弊から防止する最善の方途でもあるといえよう。そういういみで人口政策こそ民主主義的政治指導下の文化國家にとつて最高の國策的課題であり、萬般の國家的施策はそのような人口政策的見地から再評價されねばならぬ。產兒制限の啓蒙的勸奬も乃至は防止的制限も、これに較べては單に時の情勢に應變する行政技術的方策に過ぎないといつてよいと思う。

十、總括的摘要

以上論述するところの主眼點を主として再想概觀の便に供するいみで要約摘記すれば概ね以下の如くである。

一、個人の自由と責任をその生活信條とする近代市民が市民的教養の一つとして身につけるに到つた產兒制限行爲には近代社會の史的本質に相應した近代的人口制限行爲としての深い歷史的含蓄があり、區々たる利害得失を超えた歷史的意義と存在理由とをもつている。生活のよろこびを全幅的に享受しようとするルネツサンス的願望とその全生活を剩すところなく合理化しようとする滕れて資本主義的な精神とを一個の人格の中に矛盾なく統一せねばならぬ近代市民にとつて、產兒制限行爲は恐らく最も典型的な道德的努力の對象であるばかりでなく、個人の解放と生活の合理化を標榜する近代合理主義的精神はこのような本能的性生活の中にまで擴張されることによつて始めてその使命を完全するということもできよう。近代市民の市民的教養の一つと考えらるゝ所以で、近代社會に特有な社會階級別差別出生率はこのことを實證して遺憾ないものといえよう。

二、この產兒制限の思想とその實行を培養し擔當した社會階級的基盤は、近代資本主義の發展が迂餘と曲折の中に育てあげたところの廣汎な勤勞市民階級層である。嘗ては專ら支配階級の利害に奉仕したマルサス人口論はこの新しい階級的基盤の上に繼承せられることによつてその傾向的な

志向を一新し、近代市民の實踐的イデオロギーとして更生したということもできよう。所謂新マルサス主義の主張と運動とが近代產兒制限の中樞に浮びでてくる所以である。この近代市民階級層の生成と擴大は資本主義發展の史的成果である一般生活水準の向上過程と表裏するものであるが、それが自己の勞働力以外に市場に賣るべき商品をもたない勞働者自身をも一個の近代市民として生活し意慾し思考せしむるに足るほど充實するに隨つて產兒制限はその大衆化の速步をいよ〳〵早くし、そして產兒制限問題は過剩人口問題に代つて近代人口問題の焦點に浮びでてくる。いゝかえれば、出生率の恒常的な低下傾向も亦加速度的に深刻化しはじめ、新しい人口危機への展望を拂拭し難きものとするのである。

三、乍併、產兒制限思想の培養とその大衆的普及にとつて直接の起動因をなすものは、一般生活水準の上昇にも拘らず實質的にもまた心理的にも却つていよ〳〵累加するところの生計負擔の重壓である。社會的富と福祉の躍進的な增大傾向にも拘らず之に對する個人の分有能力は却つて相對的には減退傾向を餘儀なくされるという資本主義經濟に固有な發展傾向こそ產兒制限の眞實の社會經濟的背景をなすものであり、基本的恒常的な過剩人口傾向の中に新しい人口危機への進行を餘儀なきものとする近代社會の人口法則の眞實の推進力でもあるのである。この基本的矛盾を充實し展開する所以の現實の槓杆である勞資兩階級への階級的分裂傾向は近代社會の基幹的動向として廣汎な市民階級層の生成と表裏して進行しており、近代市民の生活意識を社會心理的にいよ〳〵纖細過敏なものとする。鋭い近代自意識の根源も亦そこにあるといつてよいが、自由の意識を放逸な個人主義的特權への欲望にまで抽象し、その合理主義的精神を皮相な功利主義的打算の精神に停迷させざるをえない根本の理由も亦この階級的分裂の中にあるといえよう。非合法的な墮胎行爲がその動機と形態とに相違はあれ階級層の上下を通じ產兒制限行爲の必然的隨伴現象として現われざるをえない理由はそこにあり、近代社會における產兒制限行爲の史的功過に關する虛實相表裏した樣相も亦そこから生まれる。惣じて道德的頹廢現象は人口危機の進行と不可分のつながりをもつており、その病勢昂進の臨床的指標とするに足るものである。

四、が社會階級的分化と葛藤は人間共同生活に不可分な存在理由をもつており、そして階級社會においてはその階級鬪爭は社會生活を合理的に運營する合理的な手段として正當ないみをもつている。たゞそれが階級的利害の對立葛藤の中にもなおかつその全成員にとつて共同の運命として體驗されていた共同社會的意識を消磨させ、人間的生存の實體的な基礎である運命共同體的意識を弱體化し解體しゆくところに謂うところの人口危機、いゝかえれば人口そのものの生物學的喪亡過程も亦必然化されるのである。急激な人口減少傾向が過剩人口傾向を緩和するよりも却つていよ〳〵深刻化してゆくであろう全社會經濟構造の惡循環的解體過程は社會倫理の頹廢と共に共同社會的結合の弛緩として本格化し、人間共同の運命に對する健全な感覺の喪失によつてその破局的段階にまで進行するのである。そして我々がいま今日の產兒制限問題に關聯して特に人口問題の立場から疑念し杞憂するところの問題も亦この點にあるのである。近代合理主義的精神の功過にかゝわるともいつてよいこの問題は、翻つては又、近代市民社會の中にその眞實の母胎として生長してきた近代民族國家の運命と不可分なつながりをもつている。過剩人口傾向は近代資本主義社會にとつて社會經濟的必然性をもつた一つの宿命的な現象であつた。產兒制限の普及と之に伴う出生率の低下傾向が、同じく近代資本主義の發展に伴うその史的成

果として、この過剰人口傾向に對する大きな史的攝理となるか、乃至は進んで謂うところの人口危機への進行を餘儀なきものとするか、この二つの道は近代市民がその共同の運命を寄託してきた近代國家の將來における使命と不可分のつながりをもつているのである。

五、危機の意識こそ人口問題を人口問題固有の本格的な問題意識にまで立ち還らせる。蓋しそのような危機の意識の中に再認される運命共同體的意識への主體的反省こそ人口問題が抑〻問題として提起される根本の前提であるからであり、かつまた人口問題が歴史の全進行に對して進んで發言し參劃しうる所以の眞の據りどころをなすものに外ならないからである。人口問題の立場からする各般の社會經濟的變革への要請も亦そこから出發しそこへ歸一するものでなければならぬ。廣汎多岐な近代市民階級層の健全な發展のために着手されねばならぬ各般の社會經濟的諸方策の成否如何も結局はこれら近代市民の多端な生活意慾を近代國家の民主主義的基盤として共同の運命の下に統合しうるかどうかの一點にかゝつており、その多感な生活意識の中に人間的生存そのものに對する健全な運命感を保全し保育することに成功しうるか如何かにかゝつている。産兒制限をその歴史的な眞價において育成すると共に、その過不及の危險を回避する所以の最善にして唯一の方途も亦この外にはないと思う。人口問題の立場から要請せられる健全なる民主主義的政治指導の理想はそこに歸着するわけで、そういういみでは人口政策こそ將來文化國家にとつての最大の國策的關心事だといつてもよいのである。そして恐らく人口動態の社會階級別相貌における本質的な變動と所謂適正人口を中心とした彈力性ある人口の動きがその政策的效果を判定すべき最好の指標となるであろう。

× × ×

附論　我が國における人口問題並に産兒制限問題の特殊的樣相について

飜つてわが國における人口問題と、特に産兒制限問題の實情について多少の補足的觀察を試みる。專ら西洋先進諸國を對象として試みられた以上の理論的省察にして大過なしとするならば、その本質的な諸傾向は原則的意味においてそのまゝこゝにも妥當するものであることはいうまでもない。たゞ近代國際社會における我が國の政治經濟的な後進性と、これに伴うさまゞ〳〵の社會經濟的錯綜が、わが國特有のその他の諸條件と相俟つて、特殊の樣相を發現させていることを注意せねばならぬ。とりわけ、近代社會の各發展階段に照應する各種の問題象面が同時に併存し、互に干渉錯綜しているという問題の重層的錯綜性に注意する必要があろうと思う。

近代日本の人口問題における基本的現象の一つは農村過剰人口であるが、問題の重層的錯綜性も亦こゝにおいて最も典型的である。我が國農村人口も亦近代資本主義的生産關係の生成過程に伴い當然にその封建的停滯性から解放せられ、既に德川時代末期より出生率の近代的上昇の跡を示してはいるが、明治以降特に近代國家として軍事的必要の充足を中心課題として國家權力の保護助成下に強力に推進させられた日本資本主義の發展方向は農村社會の自生的なる近代化過程を遲滯させたばかりでなく、寧ろこれを近代産業資本の利害の下に拘束し、國際競爭裡の後進資本主義にとつて唯一の武器である低賃金勞働の不斷の給源としてその封建的諸關係を強く殘存させることを餘儀なくした。從つて農村人口は最初の典型的な近代小市民として更生することもなく、さりとて典型的な賃勞働者としての

自由を實現することもなかつたわけで、そのような半封建的生活環境下に人口增加に對する近代的安全瓣の侵入が望むべくもなかつたことは極めて當然のことといわねばならぬ。そこに我が國における農村過剩人口の基本的、構造的な性格があるといえようと思う。

農村人口について指摘せられるこのような後進的停滯性は、單に農村人口が我が國總人口の中で占める比重の大いさからばかりでなく、特にそれが都市人口の絶えざる補給源であるといういみからも、同時に我が國人口現象の基本的性格を決定せねばならぬ。勿論、日本資本主義がそのような跛行的形態においてもせよ一應達成しえた發展段階の高さは決して無視し難い。大正年間末期以降にみる我が國出生率の恒常的な低下傾向は現在なお極めて輕度のものであるとはいえ、社會全般に亙る近代化過程が決して無視し難い前進過程を辿つていることを實證するに十分なものであろう。ただこの出生率における近代的な足どりの發現も、一般生活水準の上昇過程を表章するよりは、寧ろより多く我が國資本主義の早熟的な早老性を物語る傾きがないでもない。いゝかえれば、それは我が國産業資本が既に早く國民生活水準の犠牲において海外市場における獨占利潤を確守せねばならぬ本格的な帝國主義的發展段階に入つたことをいみする。そしてこの極めて低位な生活水準に停滯する廣汎多岐な市民階級層の存在こそ、正常なる自生的發展を缺いた日本主義の實情を表徵する第二の基本構造的な事實に外ならぬ。出生率の低下は近代的教養の普及によるというよりは寧ろより多く皮相な近代生活様式の重壓に基因していると思う。封建的な生活意識の殘存と近代市民としての經濟的逼迫とはこの社會層を一貫する性格的な事實で、傳統的な家族主義的精神を背景とした多産的傾向と近代的小家族主義への現實的必要はこゝでは相互に干渉錯綜して複雜多端な人口動態を示しているが、そこに一貫する總括的な傾向はやはり近代的意味での過剩人口傾向であるといつて大過ないと思われる。それが、上記農村における過剩人口の事實と相照應する基本構造的性格のものであることはいうまでもなく、結局は日本資本主義の後進性に基く早老性がこの近代社會の原則的傾向を永く且つ一層深刻に發現させているといつてよいものである。

從つて、特に産兒制限問題の上から之をみても、さまゞの史的象面の錯綜を否定し難い。地方の一部には、特に人口流出の便をえ難いところにおいて、いまなお原始的な方法による墮胎間引きの習俗が存續しており、他方近代的市民階級層の中にあつても産兒制限は十分に近代市民的教養としての本格的な思想的背景をもつことなく、逼迫せる現實的必要が强要するその普及は性病豫防の知識が新しい必要のために轉用されたといつた域を越えることあまり遠くないもののようである。

この日本資本主義の後進的躁急性が國民大衆の遅れた社會意識を背景としてファッシズム的變態をとげ、戰爭への冒險を試みるのやむなきに到つたことは極めて自然の成りゆきであつたといつてよいが、敗戰後の現狀は食糧の絶對的不足といういみで更に最も原始的な過剩人口形態をつけ加え、人口問題への關心の再燃は取り殘されていた産兒制限の普及を以つて恰も平和國家再建のための萬能藥であるかの如くにさえ考えさせるに到つた。乍併、この過剩人口はその現象形態においてこそ極めて原始的であるが、その本質においては寧ろ過去數十年に亙る日本資本主義發展の總括的決算とも稱すべきもので、その基本構造的な過剩人口傾向を破局的な形態において顯在化したといういみでこそ意味があろう。いゝかえれば近代社會の生成期に特有な過剩人口傾向がそのまゝ永く持續し宿弊化されてその

政治的な結末が今日の過剰人口狀態にまで顯在化したのだと考へるのを至當としよう。そして末期的な人口危機への杞憂がこゝでは却つて顯在的な過剰人口の姿で實感されているといつてよいのである。

對策はそれだけ積極的かつ基本的でなければならぬ。我が國近代社會の構造的性格的な變革を出發點とするものでなければならぬ。過剰人口を低賃金勞働の資源として利用することはすでに不可能でもあり、また二度と過去のあやまちを繰り返すべきでもない。健全な民主主義的基盤の上に國民生活再建の方途を講ずる以外に生きる途はないわけで、まさしくこの近代國家の世界史的な動向への自覺を我が國現下の人口問題は強要し且つ要請するのである。たゞその方途が多難で且つその效果が相當に遠い將來にしか期待し難いところから、人々は躁急な過剰人口對策を模索する。產兒制限の普及をこの國難打開の萬能藥視する傾向もその一つの現われに外ならないが、近代市民としての永い精神的訓練を前提とするこの市民的教養が恰もモンペをスカートにはきかえるように無難に身につけることができたとしても、それが當面の食糧問題の解決に何程の實效があるかは多少の統計的計算の勞をいとわないならば極めて明瞭なことである。いうまでもなく個々の家庭にとつては一回の妊娠と一人の出生兒の存否は特に我が國今日の世情にあつて極めて重大な事件である。產兒制限は一段と今後に普及をみるに相違なく、その正しい指導と啓蒙とが差し當つての緊要事であることはいうまでもないが、しかし人口政策的觀點から要望せられる本格的な產兒制限思想の普及と實行とは單なる啓蒙的指導の能くしうるところではないことを特に銘記せねばなるまいと思う。（昭和二二・九・二五）

昭和二十五年までの推計將來人口の改算

舘　稔
上田正夫
淀田嘉彰
高木尙文

一、推計將來人口改算の事情

我我が本誌前號で分析した經濟安定本部統計研究會の昭和二十五年までの推計將來人口[1]が、その後の新しい資料に基いて改算せられた。本研究所において改算の作業を擔當した關係上、我我は以下簡單にこれを說明して參考にしようと思う。

昭和二十一年八月、第一次推計將來人口〔本誌前號で分析したもの。以下このように略稱する。〕が發表せられて以來、我我は、常に事實と推計との差について檢討をおこたらなかつた。上掲の稿において我我は、昭和二十一年末に至るまでの檢討の結果を略說しておいた。今、その後の結果をあわせてその要點を列記すると次の如くである。

（一）昭和二十一年十月一日現在で、事實は第一次推計の中央の値よりも八萬余多かつた。この差は事實の〇・一一％に當つている。